

# 親鸞思想における釈尊の教説の意味

龍谷大学 玉木興慈

## 1. 親鸞思想は廻向の仏教

- ①つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。〔『教行信証』「教巻」〕
- ②しかれば、もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと、知るべし。〔『教行信証』「信巻」〕
- ③それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。知るべしとなり。〔『教行信証』「証巻」〕

## 2. 往相廻向の教

往相回向に行・信・証のみではなく、教を含む。

真実の教を『大無量寿経』とされるが、『大経』の内容が語られていない。

往相回向の「教」とは何か？

- ④それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲すなり。ここをもつて如来の本願を説きて経の宗旨とす、すなはち仏の名号をもつて経の体とするなり。〔『教行信証』「教巻」〕

cf.大原性実『教行信証概説』第四章「親鸞の教法観」平楽寺書店、1959年。

## 3. 出世本懐

親鸞の浄土三部経観として三経隠頭が挙げられ、『大経』『観経』『弥陀経』とも出世本懐と言える。しかし、親鸞が真実の教として『大経』を指定するのは、弥陀の本願が説かれているからである。釈尊の教説に先立って、弥陀の本願に根拠があるということである。

- ⑤弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御積虚言したまふべからず。善導の御積まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。〔『歎異抄』第2条〕

cf.村上速水『親鸞教義の研究』第一章第四節「親鸞における顕真実の意義」永田文昌堂、1968年。  
石田慶和『『教行信証』の思想』第二章「宗教的真理」法蔵館、2005年。

## 4. 五徳瑞現・仏仏相念

往相廻向の教とは、『大経』の内容ではなく、弥陀の願心が釈尊の心に入ること。

cf.岡亮二『『教行信証』「行巻」の研究』序篇第五章「「教巻」大意」永田文昌堂、1996年。

## 5. 釈尊の説法

釈尊の弥陀浄土についての教説が、この世の凡夫にも理解しうる『大経』の説法となる。弥陀の願心を釈尊が説法する、これが往相回向の行であり、「行巻」の主題となる。